Tristram Shandy の登場人物を Head と Heart で分類する

加藤　正人

1. はじめに

本論は学習院英文学会大会（2014 年 11 月 22 日）における口頭発表原稿に大幅な加筆と修正を加えたものである。

口頭発表の主張は、Laurence Sterne 1713–1768 の『トリストラム・シャンディの生涯と意見（*The Life and Opinions of Tristram Shandy, Gentleman*）』（1759 or 1760–1767）を総括的に論ずるキーワードは Head（頭）と Heart（心）という二つの概念だということだった。これを発表した時には無知であったのだが、よく調べたら、坂本武先生の『ローレンス・スターン論集』（2000）に同様の主張が書いてあった。それは本文で引用する。要するに、頭と心の調和が大事、ということである。この二つの概念は、それぞれ Tristram の父 Walter Shandy と叔父 Toby Shandy により代表されるというのも全く同じである。ただ、坂本先生は、本文から詳しく引用をなさっている訳ではない。なぜなら、先生のこの著作は、Sterne を総括的に論ずるためのもので、各作品に与えられる紙面は限定されているからである。ただ、アイディアは全く同じである。というより、ことによると、それぐらい（Head と Heart の両立が大事なこと）なら読めば分かることかもしれない。しかし、そんなことをいっていたら研究など無用で、「読めば分かる」すなわち「解説する必要などない」となってしまうので、Head と Heart が本作では大事ということ自体は言及する価値があるのだが、坂本武のより総括的な労作に書いてあるのでは、著者が口頭発表したアイディア程度で独創性を主張するのも詮方ないだろう。という訳で、この小さな論文では、Head と Heart という概念は、いかなる文脈で理解されるべきかを論ずる。その文脈創造が本論の目的である。すなわち、Head と Heart という概念が最重要であるという、坂本武と並ぶ主張は本論においても変わらないのだが、その概念がその中で理解されるための文脈に独創性を見いだすのが本論の目的である。本論の結論をいえば、Sterne はなるほど *Tristram Shandy* において Head と Heart の総合を望んだが、最終的には、彼は Head を捨て Heart を選んだ、となる。その根拠を negative creation（否定的創造）という文脈で提示するのが本論の目的である。この概念は自前である。

2. 口頭発表のレコード

2.1. Head と Heart を両立させた理想的人物としての Laurence Sterne

口頭発表の内容は①〜⑰から成っていた。全体像を簡単にまとめると、まず *Tristram Shandy* がどんな作品か説明し、この作品がどんな作品かを研究者から引用して説明し、こむずかしいと思われ

ている作品を多くの人に理解してもらうようにした。その際に、主要登場人物を以下のように Head と Heart に基づいて分類した。

	Head	Heart
Walter Shandy	よく言及される（◎）	あまり言及されない（△）
Toby Shandy	あまり言及されない（△）	よく言及される（◎）
Yorick	言及される（○）	言及される（○）
Tristram Shandy	判定不能（×）	判定不能（×）

これらは frequently mentioned（よく言及される）などとしてもよかったが日本語にした。「はじめに」で指摘した坂本武の『ローレンス・スターン論集』の Head と Heart に関する引用は以下である。

> ところで『トリストラム・シャンディ』の中では、「こころ」heart と「頭」head の二つの世界が、一方が他方を排斥することなしに共存しており、――例えばトリストラムの父ウォルターが「頭」の方を代表し、トウビー叔父が「こころ」の方を代表して、しかも二人ともに好人物であり、奇警ではあるが調和的である、といったふうに――それらが、しかも、喜劇的に交錯し合って、そこに〈情と知〉による独特なヒューマーの世界が現出しているのであるが、そのことの故にかえって、スターンの中心の真実がどこにあるのかつかみ難いという事態が生じる場合がある。 （坂本 100）

口頭発表では、次に、Walter, Toby, Yorick の性格を Head と Heart という観点から、本文から引用しながら説明した。Tristram を省いたのは、彼は、第三章で生まれ、第七章でフランスで療養している以外は、ほとんど人物として登場しないからである。彼は飽くまで語り手（narrator）である[(1)]。

Walter Shandy については以下を引用した。

> My father a man of deep reading—prompt memory—with Cato, and *Seneca*, and *Epictetus*, at his fingers ends.— (*TS* 5.6.288)
> My father […] was very different [from Toby], as the reader must long ago have noted; he had a much more acute and quick sensibility of nature, attended with a little soreness of temper; tho' this never transported him to any thing which looked like malignancy; (*TS* 2.12.91)

Toby Shandy について以下を引用した。

> his [Toby's] heart never intended offence to his brother,—and as his head could seldom find out where the sting of it lay, (*TS* 3.41.191)

兄弟二人について以下を引用した。兄弟は頭と心で分類されるが、ある時は一体になる。

> Although Walter's fascination for rhetoric and Toby's equal engrossment in the principles of war-making do not enable the two brothers to meet linguistically, […] they appear to communicate truly at given moments of the text, through benevolence and general kindness, (Tadié 50)

ヨリックについて以下を引用した。ヨリックは頭があり質問にも答え、心もある。

> *Yorick*, who was inquisitive after all kinds of knowledge, (*TS* 2.17.113)
> L--d! said my mother, what is all this story about?——
> A COCK and a BULL, said Yorick——And one of the best of its kind, I ever heard. (*TS* 9.33.539)
> *Yorick* laid his hand upon his heart, and gently shook his head; (*TS* 1.12.26)

Yorick は Sterne が好んで自分に使った名でもあった。例えば、*The Sentimental Journey* (1768) と『イライザに寄せる日記』（1767 年頃執筆）において。Yorick は Head と Heart が両立した人物として *Tristram Shandy* で描かれている。Laurence Sterne は自分自身を理想的人物として描いた。以上が口頭発表の内容である。

3. 口頭発表と異なる部分

3.1. *Tristram Shandy* が理解されるべき文脈の創造：Negative Creation（否定的創造）

「影響・受容」研究は碩学に譲るとして、本論は、十八世紀小説の類型を行う。なるほど、化学と文学の研究は違う。文学はそれほど明瞭には説明されない。文学はしばしば類型を拒む。例えば、Northrop Frye の'*Anatomy of Criticism*'に文学の分類があるが、こうしたものは、特にその思想家のファンでもない限り受け入れにくい。例えば「文学理論」を好むかどうかも研究者による。「ミシェル・フーコー」や「ジャック・デリダ」と聞いて万人が同様に興味を持つ訳でもない。まして、本論がここで提示する分類が人口に膾炙するか不明である。がともかく、ここでは、その価値が信じられるべきであろう。アリストテレスは『トピカ』で、知ることはそれ自体で価値があると信じられるべき、のようなことを冒頭付近でいっていた。文学研究にも効用があると思っている人もいるかもしれないが、やはり、文学研究もそれ自体で価値があると信じられねば辛い。まして、相対的にいって特殊な、すなわち見当りにくい研究であるならなおさらである。しかし同時に、そんじょそこらにある研究なら価値がない。これは学術のジレンマといえる。そのジレンマから抜け出るた

めにも、本論は、類型の価値を信じるものである。

文学作品はある文脈で理解されるべきである。例えば「作者」である。中国の『資治通鑑』は Samuel Johnson の'*Lives of the Most Eminent English Poets*' と同じ方法に基づくらしく、まず作者の伝記、その次に作品の成立過程、そして作品の評価と続くそうである。それとは逆に、「作者は死んだ」という言葉に代表されるように、歴史主義や伝記主義から離れた研究も二十世紀から盛んである。本論は、後者に属するといえる。それがよいかどうかよりは、事実、そうである。理由をいうとするなら「前者の研究は他の人がやる」といえる。すなわち、本論は、他の誰も提示しないだろう分類を提示する。Heart と Head という Body & Mind のような対比はしばしば見受けられるが、さすがに、本論のような分類は先例がないと判断した。つまり、あるかもしれないが、はっきりとはないだろう[(2)]。

Tristram Shandy は十八世紀の作品である。文学史では、「十八世紀」と「ロマン主義」は通例異なる。*Tristram Shandy* を Romanticism の文脈に入れる向きもないではない。例えば、'*The Cambridge Companion to Fiction in the Romantic Period*' はこの *Tristram Shandy* を年表の最初に置いている。

また別の人はこの作品を Preromanticism（ロマン主義以前）の文脈で論じるかもしれない。しかしながら、本論は、大よそ「長い十八世紀（the long eighteenth century）」という文脈で *Tristram Shandy* を論じている。「長い十八世紀」は Frank O'Gorman のそれのことで期間は 1688–1832 である。

補足すれば、本論の区分で重要なのは 1832 年の方である。なぜなら、Mary Shelley の *Frankenstein*（1818 年出版、1831 年改訂）が本論では言及されるからである。言及されるべき一番早い年号は 1719 年すなわち Daniel Defoe の *Robinson Crusoe* の出版年である。つまり、内実、1719 年から 1818 年の 99 年が本論が考える十八世紀である。これはほぼ「一世紀は百年」という通念に合致する。

本論は *Tristram Shandy* を negative creation という文脈で分類する。この概念は novel と romance の違いに基づく。

例えば、*Robinson Crusoe* は novel ではあるが、romance 的な novel である。novel は通例市民生活を描く。しかし、この海上放浪者が辿り着く島に社会はない。そこには市民がいない。彼の生活は異常な生活である。大多数の人の生活とは隔絶した世界を描くのは通例 romance である。その意味では *Robinson Crusoe* は非常に romance 的である。

本論の negative creation という文脈では、positive creation と negative creation に十八世紀 novel を分類し、その negative の側に *Tristram Shandy* を位置させ、さらに Head と Heart について考察する。これは、繰り返すように、*Tristram Shandy* 内では Head と Heart の調和の可能性が模索されているという単純な理解とは、その理解の土壌が異なる。本論で提示されるように、論者は、飽くまで以上の

二つの文脈で Head と Heart を論ずるのであり、それらがその中で理解される文脈の方こそがより重要である。

3.2. Negative Creation（否定的創造）とは何か

「否定的創造（negative creation）」というと、John Keats の手紙（1817 年 12 月 21 日）の「ネガティブ・ケイパビリティ（negative capability）」が思い出される。これは、Shakespeare が所有していたと Keats が主張する能力である。この概念で Keats は「半知（half-knowledge）」を重視した（remaining content with half-knowledge）。人は直ぐ理解を求めるが、Shakespeare は、不確かさ（uncertainties）や謎（mysteries）に留まる力があったと Keats は、主張した。この概念は、頭だけで考えることをいましめているといえる。頭は何でも理解して割り切ろうとするが、それが最善ではないと考えられるのだ。

本論で主張される negative creation というのは、既存の規律や概念に反することによる創造のことである。例えば、Sterne は既存の概念に反して小説を構築した(3)。彼は小説を解体するかのように書いた。例えば、Defoe の *Robinson Crusoe* をこの negative creation の系譜の最初に据えることができる。

Robinson Crusoe は父の反対を押し切って航海に出た。彼に父を否定する力がなければこの作品はなかった。ゆえに、この作品は negative creation である。また、Swift の *Gulliver's Travels* も重大なるマイルストーンである。彼もまた既存の社会を捨て旅に出て、戻って来ても、元の社会に溶け込むことを拒否して馬小屋にこもる。これもまた negative creation の好例である。なぜなら、そうした否定の力が作品の推進力だからである。

長い十八世紀の文脈でいえば、Mary Shelley の *Frankenstein* も典型的である。Frankenstein 青年は同時代の科学に反発して、錬金術に傾倒し、怪物を生んだ。これらの作品には既存の考えの懐疑主義があり、それへの不服従がある。それは、今あるものを否定して新しいものへと向かう力である。その力が negative creation である。その negative creation と対比させたものとして positive creation を求めると以下のようになる。否定的創造と対比される肯定的創造とは、既存の価値観を最終的には保持する作品である。ここでは、negative creation に基づく作品は romantic novel と呼ばれ、positive creation に基づく作品は novelistic novel と呼ばれる。なぜなら、非日常への憧れは romance 的だからである。

POSITIVE CREATION	NEGATIVE CREATION
novelistic novel	**romantic novel**
preservative	skeptical
obedience	disobedience
oldward	newward
Pamela	*Robinson Crusoe*
Tom Jones	*Gulliver's Travels*
The Vicar of Wakefield	*Tristram Shandy*
Pride and Prejudice	*Frankenstein*

図 1

ロマン主義時代における代表的negative creationは*Frankenstein*である。この作品は*Tristram Shandy*と似ている。前者で、怪物は創造者の手を離れて独り歩きする。そして、怪物は主人の主人にすらなる。同様にして、*Tristram Shandy*では、父Walterは子Tristramの教育書としてのトリスラペディア（*Tristrapaedia*）を書くが、子はその記述に先んじて成長して行く。このことにより、本の虫である父は子に追い付かない。子は親の手を離れて成長する。そして、親の親ともいえるTristramは*Tristram Shandy*という書物で父を創造するべく語る。この*Tristram Shandy*と*Frankenstein*という二つの書物を、positve creationと対比させながら図にすると以下になるだろう。

POSITIVE CREATION		NEGATIVE CREATION	
novelistic novel		**romantic novel**	
lightward	darkward	**lightward**	darkward
Tom Jones	*Clarissa*	***Tristram Shandy***	*Frankenstein*
comic	tragic	**comic**	tragic
head	heart	**heart**	head

図 2

繰り返すように、novelisticであるとは、社会の既存の枠組みに留まることである。

例えば、Tom Jones は放浪するが、結局、最後に社会で地位を獲得する。対して Robinson Crusoe は、救助された後も冒険に出る。Gulliver は社会に組み込まれることを拒否した。このようにして、社会を肯定する方を novelistic とする。これは novel と romance という対比に基づいており、romantic が否定的であることから、肯定的である方が novelistic である。

興味深いことに、新しさを意味する novel の中では、既存の体制を保持することは古くなる。すなわち、novel の中では、romance を求めることが新しい行為となる(4)。これは Michael McKeon の'*The Origins of the English Novel*'における弁証法の概念とも合致する。すなわち、novel, romance, novel の止揚である。Romanticism における romance はそれ以前の romance とは別次元である。Aphra Behn などの romance から、Samuel Richardson などの novel へと進み、Romanticism へと至るのが長い十八世紀におけるダイナミズムなのだ。すなわち、古い romance に対してはなるほど novel は new だが、その novel 内では romance を求めることの方が new である。これ故に、図 1 では novelistic が oldward であり romantic が newward である。これは、表面だけを見れば本来逆であるように見えるにもかかわらず、否、むしろそれ故にこそ本論で重大である。

次に、comic, heart, lightward の意義を論ずる。*Tristram Shandy* は喜劇的作品であり、*Frankenstein* は悲劇的作品である。なぜなら、前者で描かれるべきものはより良い世界であり、後者で描かれるべきはより悪い世界だからである。科学の力で、死体の断片が復活することがより良い世界であるとはいいにくい。加えて、comic を head と、tragic を heart と同じと見る。なぜなら、悲劇は一般的に無知から来るからである。アリストテレスの『詩学』の通りに（アナグノリシスとペリペテイア、認知と転回）、前以て未来を知らないことが悲劇につながる。それが悲しい。対して、喜劇では無知は笑いへとつながる。無知が笑うべきことだからといって、『オイディプス王』を笑うのはありにくい。

図 2 での否定的創造に対する肯定的創造について簡単に説明すると、例えば *Tom Jones* は、comic の作品でそれ故に属性として head であり、いわば、その時光の方へ向かう。この「光の方へ（lightward）」という単語は別の単語で置き換えてもよい。いずれにせよ、既存の価値を保存する方向に向かうというのが重要である。逆に、Clarissa は、tragic の作品でそれ故に heart であり、いわば、その時闇の方へ向かう。当時、殺人者たる Richard Lovelace に好意を寄せる読者がいたというが、それは闇の方に惹かれる人間がいつの世にもいるからだろう。

3.3. Sterne の Heart への傾斜

Tim Parnell は'*The Cambridge Companion to Laurence Sterne*'内の小論文で、Sterne の Eliza Draper へ

の手紙を引用していた。そこで Sterne は、*Tristram Shandy* が Heart ではなく Head の作品であることに難を示した。Parnell は‘Sterne half dismisses *Tristram Shandy* as a product of his head’ (Parnell 74)と書いた。そして Sterne は自身の sermons (牧師としての説教) に反映される心をより重視した (74)。Parnell は続いて *Tristram Shandy* の第四章の一部を引用していた。その引用では、作者と同じ牧師たる Yorick が、自身の説教が、心からではなく頭から出たことを悔いていた。すなわち‘it came from my head instead of my heart’。Parnell の引用には前の部分がこうあった。‘I was delivered of it at the wrong end of me’ (*TS* 4.26.254)と。つまり、自分の間違った部分から出たものだと。作中の言葉を作者自身の言葉と取るのは危険だが、一見して Head と Heart の両立を目指す *Tristram Shandy* が Heart の産物であることが望まれていたことは非常に重要である。

口頭発表においては、*Tristram Shandy* 以外の作品を敢えて無視し、なおかつ、簡単な二分法で区分することにより、*Tristram Shandy* が大多数の人に理解可能となるよう工夫した。しかしむしろ、*Tristram Shandy* を長い十八世紀の他の作品と比較検討することにより、*Tristram Shandy* は Head と Heart の対立の Heart の方であると理解される。これは Head と Heart の内の Heart に寄ることが独創的意見であることを意味しない。なぜなら、それは Parnell が指摘していることでもあるからである。そうではなく、いずれにせよ、この対比を negative creation の文脈で理解することこそがこの論文が新しく提唱していることなのである。これは口頭発表とは全く異なる部分である。なぜなら、そこでは、どちらか片方に偏ることが戒められていたからである。

本来、Sterne は Head と Heart の両立したのは事実だと思う。しかし、彼はそれだけでは終わらなかったのだ。彼はいわば、その対比自体を心と共に眺めていたのである。彼は、上述の Keats の negative capability における half-knowledge とも似て、理性による理解を必ずしも重視していなかったともいえる。そもそも Sterne は数多くを他者から剽窃して *Tristram Shandy* を執筆したことで知られる。この事実は十九世紀前半にはもう広く知られており、例えば John Ferriar の研究が著名だった。この研究は Walter Scott も Sterne についての批評を書く際に言及していたものであった。

剽窃というスタイルで書いた Sterne 自身がそれほど頭脳が人一倍優れていたとは限らない。なるほど、*Tristram Shandy* は繁雑である。しかしその事実は、Sterne の Head への偏りを意味しない。逆に、Sterne は剽窃というスタイルで書いていたことから分かるように、むしろ half-knowledge という考えのもとに執筆を行なっていたとすらいえるかもしれない。なぜなら、他人の知識を借りて考えることが、知として十全であるとはいえないからである。つまり、彼は、飽くまで、Head ではなく Heart の側にい続けたともいえるのだ。これは不利の利かもしれない。つまり、彼は Head のみで優秀過ぎないことにより Heart を持ち続けられた。

本論は図 1 で、「新しい」を意味する novel の典型たる novelistic novel は old であるという逆理を指摘した。どこか似たようにして、剽窃という本来は心ないともいえる行為で Heart を描くというのは逆理めいたことかもしれないが、Sterne においては、それが通用していた可能性が高い。

例えば Juliet McMaster は *Tristram Shandy* が男の男による男のための書物であるという文脈で、Walter Shandy について論じており、彼女はそこで彼が mysogynist（女嫌い）であることを強調していた。それは Archie Bunker が差別主義であるのと同様であると McMaster は書いていた（McMaster 199）。この人物はアメリカのテレビ番組の人物で、はっきりと差別主義的なことを口にする滑稽な人物である。彼は笑いを誘う。いわば、毒は笑いにより毒抜きされる。McMaster の表現を借りれば「清められる（purged away）」（199）。Walter という女に難癖をつけるキャラクターにもこのことが起こる。論文の最後で、McMaster は'*Tristram Shandy* is *about* misogyny, and against it' (213)と結論する。より重要なことには、こうした逆理めいたことは *Tristram Shandy* における Head と Heart にも起こっている。すなわち、飽くまで、この作品は Head の産物であるにもかかわらず、否、それ故にこそ、この作品は Heart の作品であるとすらいうことができる。なぜなら、Head に偏り過ぎることによってこそ、その反対物である Heart の重要性がいわば浮き上がるからである。まるで、光を浮かばせる闇はできるだけ深くなければならないかのように。

3.4. 失敗としての成功

小説史を見れば、*Tristram Shandy* は *Pamela* より *Frankenstein* により近いといえる。後者は、失敗が成功という話である。なぜなら、Frankenstein が創造にどこかでは失敗していなければ話にならないからである。すなわち、怪物の見た目が人間のままであったり、その性格が充分に従順であったなら話にはならない。話は失敗のままで成功し続ける。

Pamela は、なるほど、主人 B と結婚する。しかし、それは従者が主人に勝利することを意味しない。むしろ、Pamela はいよいよ従順になる。しかし、Frankenstein の怪物は主人にすら勝利するのである。'You are my creator, but I am your master;—obey!' (*Fr* 3.3.120)と。しかし、それこそは最終的に悲しみとしてあらざるをえない。失敗作としての怪物は、その失敗においてのみ成功する。以上は *Tristram Shandy* が「失敗する書物」という Patricia Meyer Spacks の文脈と合致する。

> The eponymous hero of *Tristram Shandy*—his balance of reason and passion precarious at best, his existence a losing struggle with death, and his goal unachieved and unachievable—exemplifies failure, except in the fact of his book. (Spacks 129)

つまり結局、Sterne は、最終的に、知に走ることにより知を否定しているとすらいえる。それが彼の知恵だった。

注

(1) 通例、*Hamlet* に一番登場する人物は Hamlet であり、*David Copperfield* に一番登場する人物は David Copperfield だと読者は思う。仮に *Hamlet* で、Hamlet が the time is out of joint といって退場した後、ほとんど登場しなかったら、似たような印象を読者に与えることだろう。「この本は *Hamlet* とあるのにほとんどその Hamlet が登場しないじゃないか」と。別の例を出せば、チェコ生まれのイギリス作家 Tom Stoppard の *Rosencrantz and Guildenstern Are Dead* （1966）が *Hamlet* という題名であったなら、*Tristram Shandy* と同じ状況になるだろう。なぜなら、観客や読者は Hamlet が登場すると思うのに、そこにいるのは Rosencrantz と Guildenstern という兄弟のような人物であり続けるからである。そして、この二人と似たキャラクターが活躍するのが *Tristram Shandy* という作品であるともいえ、*Tristram Shandy* の Rosencrantz と Guildenstern こそが Walter Shandy と Toby Shandy といえる。なるほど、*Tristram Shandy* の方が遥かに先んずる作品であるのに、それを説明する際に後代の作品を説明するのは少々おかしいかもしれない。しかし、この論は、*Tristram Shandy* という作品を、専門外の人々をも含めて、万人にとって分かり易いものにするためのものなのである。ともあれいうべきことは、この *Tristram Shandy* という作品の主要登場人物は決してその名目上の主人公たる Tristram Shandy という人物ではない、ということをはっきり意識する必要があるということだ。*Tristram Shandy* を定義するなら「当人がほとんど登場しない自伝作品」となるだろう。

(2) この body と mind という対比は、恩師塩谷清人先生が 2013 年の学習院大学英文学会誌で Jonathan Swift の問題であると指摘していた。

(3) *Tristram Shandy* を論ずる際有用なテーマを列挙した本として Henri Fluchère の'*Laurence Sterne: From Tristram to Yorick*'がある。第四章は The Mind and the Clock で、The Reign of Time, Time and the Novel, Sterne the Rebel, Chronology and Time などが論じられた。

(4) Lennard J. Davis は'*Factual Fictions*'で novel と romance の違いを九種類に分類していた。その第一が以下であった。'The romance is set in the distant, idealized past; the novel is set in a more recent, less heroic, setting' (40).

参考文献

Bosch, Rene. *Labyrinth of Digressions:* Tristram Shandy *as Perceived and Influenced by Sterne's Early Imitators*. Trans. Piet Verhoeff. Amsterdam: Rodopi, 2007. Print.

Connely, Willard. *Laurence Sterne as Yorick*. London: Bodley Head, 1958. Print.

Davis, Lennard J.. *Factual Fictions: The Origins of the English Novel*. Philadelphia: University of Pennsylvania Press, 1996. Print.

Fluchère, Henri. *Laurence Sterne: From Tristram to Yorick: An Interpretation of* Tristram Shandy. Trans. Barbara Bray. London: New York: Oxford UP, 1965. Print.

Hartley, Lodwick. *Laurence Sterne in the Twentieth Century: An Essay and a Bibliography of Sternean studies, 1900-1965*. Chapel Hill: University of North Carolina Press, 1966. Print.

Keats, John. *Seleted Letters*. Oxford: Oxford UP, 2002. 41. Print.

McKeon, Michael. *The Origins of the English Novel, 1600-1740*. Baltimore: Johns Hopkins UP, 1987. Print.

McMaster, Juliet. "Walter Shandy, Sterne, and Gender: A Feminist Foray." *Critical Essays on Laurence Sterne*. Ed. Melvyn New. New York: G.K. Hall, 1998. Print.

New, Melvyn, ed. *Approaches to Teaching Sterne's* Tristram Shandy. New York: Modern Language Association of America, 1989. Print.

New, Melvyn, Richard A. Davies, and W. G. Day, eds. *The Florida Edition of the Works of Laurence Sterne: Volume 3: The Life and Opinions of Tristram Shandy, Gentleman: The Notes*. Gainesville: University Presses of Florida,

1984. 552. Print.
---. *The Florida Edition of the Works of Laurence Sterne: Volume 8: The Letters Part II: 1765-1768*. Gainesville: University Presses of Florida, 2009. 525. Print.
Newbould, M-C. "A "New Order of Beings and Things": Caricature in Sterne's Fictional Worlds." *Hilarion's Asse: Laurence Sterne and Humour*. Eds. Bandry-Scubbi, Anne, and Peter de Voogd. Newcastle upon Tyne: Cambridge Scholars Publishing, 2013. Print.
O'Gorman, Frank. *The Long Eighteenth Century: British Political and Social history 1688-1832*. London: Arnold, 1997. Print.
Parnell, Tim. "*The Sermons of Mr. Yorick*: the commonplace and the rhetoric of the herart." *The Cambridge Companion to Fiction in the Romantic Period*. Eds. Maxwell, Richard, and Katie Trumpener. Cambridge: Cambridge UP, 2008. Print.
Shelley, Mary. *Frankenstein: The 1818 Text, Contexts, Criticism*. New York: Norton, 1996.
Spacks, Patricia Meyer. *Imagining a Self: Autobiography and Novel in Eighteenth-Century England*. Cambridge: Harvard UP, 1976. Print.
Sterne, Laurence. *The Life and Opinions of Tristram Shandy*. Oxford: Oxford UP, 2000. Print.
---. *A Sentimental Journey and Other Writings*. Oxford: Oxford UP, 2003. Print.
Tadié, Alexis. *Sterne's Whimsical Theatres of Language: Orality, Gesture, Literacy*. Aldershot: Ashgate, 2003. Print.
坂本武『ローレンス・スターン論集―創作原理としての感情―』関西大学出版部、2000. Print.